

第46回 歴史リレー講座「万葉歌によまれた〈やまと〉」 井上 さやか氏 (H30.7.15)

ご存じの通り、『万葉集』は現存する最古の和歌集です。当時はまだひらがなやカタカナがなくすべて漢字で書かれており、「寒」を「ふゆ」、「暖」を「はる」、「軽引」を「たなびく」、「二八十一」を「憎く」、「山上復有山」を「出^{いで}」などの機智に富んだ表記が目を惹きます。一方、特に助詞はほぼ漢字の音だけを借りて書かれています。とくに一字一音のいわゆる万葉仮名の場合など、漢字の意味に囚われすぎないことが大切です。なお、私たちが親しんでいるひらがな交じりの表記は、後世に読み易く書き直されたものです。なかには未だにきちんと訓読できない歌も多数残っています。

今回は、万葉歌に詠まれた「やまと」のさまざまな漢字表記についてお話ししましょう。意外にも、『万葉集』には現代人に最もなじみ深い「大和」の表記がほぼ見あたりません。その代わりにたびたび登場するのが「倭^{やまと}」。この字の本来の意味はあまり良いものではなく、中国から見て外国の矮小な国を指しました。『日本書紀』では、「大倭」も「やまと」と訓ませています。

さらに、「日本」と書いて「やまと」と訓ませる例もあります。遣唐使として中国に渡った山上憶良が故郷を懐かしんで詠んだ歌、「去来子等 早日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武」(いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ)の「日本」は国号を表します。彼の最大の任務が国名「日本」を中国に伝えることだったともいわれます。この「日本」の表記がいつから大和政権を指す国号として定着したのかは判然としていませんが、この頃以前には恐らく使われていなかったであろうというのが現在の一般的な考え方です。

故郷を懐かしむ詩歌として、秦氏出身の釈弁正^{しゃくべんしょう}が唐で詠んだ五言詩の中にも「日本」が出てきます。弁正は大和宝元年に学問僧として唐に渡ったのち結婚し2人の男児をもうけますが、そのまま唐で生涯を閉じました。この漢詩は意気揚々と帰朝する仲間を見送る際に詠んだのでしょうか。故郷を想う気持ちは憶良と同様でありながら、唐を去りゆく彼の歌と対をなす漢詩といえましょう。ちなみに、弁正の次男朝元は遣唐使の帰国に合わせて訪日し、大伴家持らとともに朝廷に仕えました。そのため、この歌は最古の漢詩集『懷風藻』に記載されています。

同じく遣唐使の阿倍仲麻呂が故郷を詠んだ、「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に いでし月かも」も『万葉集』所収だと誤解されている方も多いのですが、取り上げられているのは『古今和歌集』です。仲麻呂は結局帰朝を果たせず、無念のまま客死しています。

「倭」は日本の国号を表すだけでなく、場合によっては大和盆地を中心とした奈良地域を指しました。もともとは天理市にある大倭神社の辺りの一地域名に過ぎなかった「やまと」が、古代の大王が支配を増大させた時代には、今の奈良県全域を表すまでになり、大和政権下にある日本列島の大部分を指すようにもなったとみられます。『万葉集』には、他にも「山跡」「山常」「八間跡」「夜麻登」「夜萬登」「夜末等」などの表記例が見られます。「やまと」という言葉(発音)が先に存在し、それに対してさまざまな漢字を当てたのです。「あすか」に対する「飛鳥」「明日香」もまたしかりです。

『万葉集』に収められている歌は、外国語である漢字を使って自国の文化を書き表したものです。単なる和歌集として読むだけではもったいないことです。編纂された飛鳥時代から奈良時代にかけての社会状況や海外情勢を鑑みながら古代文化に思いをはせ、さらには、今回ご紹介したように「言葉の謎解き」といった別の視点で味わってみるのもまた一興ではないでしょうか。